

「頼れる介護施設」「危ない施設」の見分けかた

2回シリーズ【その2】

多くの雑誌やネットの世界では「有料老人ホームの選び方」や、「老人施設のランキング」なるものまで解説してくれる情報があふれています。利用者側にとっての問題は、その中身を見分けるだけの知識と経験があまりにも少ないことです。前回に続いて介護サービスや施設選びのポイントを紹介します。



■「絶対入ってはいけない」老人ホームの見分け方

まず、有料老人ホームでは「体験入居」のシステムが用意されている場合があります。

通常は2泊3日コースが一般的ですが、体験入居は最低でも5日間が必要です。短期間の体験入居では、施設側が準備したプログラムを消化するだけで、本当の姿を知ることができないからです。

例えば、すでに入居している利用者たちが遠巻きに眺めていた体験入居者に声をかけてくるのは大体3日目以降で、そこで施設に対する不満の声に接することができます。利用者の声は重要な判断材料となります。

スタッフの笑顔は施設の状況を知るバロメーターとよく言われますが、おそらく短期間の入居では営業スマイルとの出会いしかありません。時間に追われて厳しい労働を繰り返しているスタッフが、それでも生き生きとして働くことができる職場かどうかを知るにはやはり時間が必要です。

体験入居期間中にチェックすべき項目は、このほかに、スタッフ控え室などのバックヤードの整理整頓状況、時には、調理場の冷蔵庫の中も見せて

もらうくらいの食欲さがあるといいでしょう。

さらに、施設長や管理者などから説明を受けるだけでなく、現場スタッフ、夜勤スタッフ、清掃スタッフなどからの聞き取りも、現場を知る大切な情報になります。

次に、家族が見学する場合は、ケアのあらゆる場面を考えた質問を用意しておきたいものです。例えば、「母親の好きな銘柄の牛乳を買いにいつてくれるのか」、「わがままな親の希望にどこまでそってくれるのか」などとい

こんなホームは要注意！

CHECK	
☐	ホームページに本社の住所、代表者の名前、電話番号などの連絡先がない
☐	ホームページに金額、数字など具体的な表示がない
☐	玄関回り、事務所、ヘルパーステーションの整理・整頓ができていない
☐	慢性的な匂いがする
☐	スタッフ、入居者の表情に生気がない
☐	スタッフに不満、不安、ストレスが感じられる
☐	スタッフ間、スタッフと入居者の言葉遣いが荒っぽい
☐	施設長の交代が頻繁
☐	スタッフの離職率が高い
☐	見学の際、施設長が顔を出さない
☐	食事の自由度が低い(アルコールなど)
☐	実費負担について言及がない
☐	介護度が増すと系列の施設に移される





たことも聞いてみましょう。

施設のケアに対する姿勢は、案外こんな質問への回答に表れるものです。

さらに、施設を運営面から分析することも必要です。事業主体、設備、職員配置、利用料金など有料老人ホームの概要が説明されている資料は「重要事項説明書」と呼ばれています。この説明書の提出は事業者には義務づけられているので、それを拒否する事業者は、その段階で信用できません。ホームページで公開されていない場合は、直接請求することもできます。

そして、内容の判断には入居者の側に立ってアドバイスしてくれる専門家の力を借りることも必要です。

■「こんなはずでは」をなくす質問の仕方

納得して入居を決めた老人ホームであっても、暮らし始めれば何かしら不満が出てくるものです。

多くの入居者は、スタッフとのなじみの関係が深まっていくことや、他の入居者と仲良しになることで、多少の不満や物足りなさを解消できます。しかし、そうならない場合、高額

な入居費用を支払ったのに退去を余儀なくされるケースも起こっています。



このようなことにならないための「老人ホーム選び」のポイントは、まず、入居時にかかる一時金と入居後（月々の暮らし）にかかる費用をきっちりと把握することから始まります。数字の把握は暮らしのあり方を考えるうえで大切なシミュレーションです。費用をかけすぎて最終的に生活保護になる人もいますから、弁護士や税理士にアドバイスしてもらうべきです。

また、施設の運営能力にも注意を払い、建物のある環境、設備内容、組織の人員配置、職員の経験年数などを確認することをお勧めします。施設の状況把握をきっちりと行くと、収益の実態から事業者の運営能力が明らかになります。さらに、入居金が安い施設だから悪い施設であるといった考え方にもならないはずで、老人ホームの実態把握はとても重要です。

スタッフの専門能力は当然必要ですが、心のこもったサービスを受けたいものです。そのあたりに関する施設側のバランス感覚をつかみたいですね。ただ、認知症介護の専門家など絶対に必要な専門職の有無、昼間・夜間の配置人数も確認しましょう。

このほかにも入居前に確認しておくべき項目があります。中でも医療体制に関しては最も注意すべきです。終身利用を謳っている施設でも、病状が悪化した段階で入院させられて二度とホームに戻ってこれないケースもあるからです。

➡ 認知症の対応チェックリスト

	A B C		
A 受け入れ可否			
B 入居後発生した場合の対応			
C 人数制限はあるか			
脳血管性認知症			
レビー小体型			
ピック病			
高次脳機能障害			
徘徊			
帰宅願望			
奇声			
被害妄想			
粗暴行為			
せん妄(幻覚、幻聴)			
介護拒否			
不穏			
異食行為			
昼夜逆転			
認知症専門スタッフ	昼 人	夜 人	
看護師	昼 人	夜 人	

点滴管理などはほとんどの施設が対応してくれますが、経管栄養、人工肛門の対応をどこまでやってくれるのか、本当に看取りをしてくれるのか、医療と介護の連携は確認しておきましょう。

グループホームの場合は認知症への対応を具体的にチェックします。チェックリストを作って説明を受けた人のサインを取り付けておくと、あとで「言った、言わない」の騒ぎに発展せずに済みます。

継続的に実施することが必要なリハビリ訓練への対応、感染症対策なども聞いておく必要があります。

また、医療に関しては、在宅医や専門病院を施設側が決めたところでしか利用できない、いわゆる自由度のない施設は避けたほうがよいでしょう。かかりつけ医との関係は一朝一夕で成り立つものではありません。入居者が信頼している医師との関係性を入居後も大切にしてくれるかどうかは、老人ホーム選びの決め手と言えるかもしれません。

後悔する前に、貪欲に質問しましょう。老親の暮らしをあらゆる方向からイメージして、考えられるシチュエーションを提示して質問することが、間違いのない老人ホーム選びを成功させてくれます。



■田舎の親の面倒、遠距離介護をどう乗り切るか



航空券に介護割引料金が設定される時代です。「遠距離介護」がそれだけ身近な存在となったことの証しなのですが、その大変さは想像をはるかに超えます。

介護保険導入から10年が経過し、全国各地、どこへ行っても同様の介護サービスを受けることができます。

しかし、離れて暮らす家族にとって、その状況に全幅の信頼を寄せることはできないのです。

遠距離介護を成功させられるかどうかは、家族が不在の期間中、その状況を詳しく伝えてくれる情報網を持てるかどうかにかかっているといっても過言ではありません。具体的には、信頼できるケアマネジャーが、報告を逐一してくれること。そうした配慮のできる介護事業者を選ぶことににつきます。

ところが、現実はそのような事業者やケアマネジャーに出会うことが最も難しいのです。

考えられる解決策としては、比較的大手の事業者で、全国ネットのサービス網を持っているところを選ぶ方法が考えられます。

とはいっても、結果的には家族全員の協力なくしてありえないのです。

現実的には家族が交替で足を運び、毎月1週間～10日間くらいはそばにいて介護することが必要です。

その間に、介護サービス事業者との関係を密にして、ケアマネジャーの全面的な支援が受けられる環境づくりにつとめることです。毎月のように通ってくる肉親の存在が見えるだけで、介護事業者の対応は確実に変わります。



道具よもやま話 (3)

道具よもやま話

3

無銘の作品



わが国の大工は、職人氣質（かたぎ）といわれるように、昔から仕事の質に関わる道具と材料については並々ならぬこだわりをもってきました。また道具をつくる側の鍛冶も大工の心意気に応じようと、心根を込めて多くの優れた道具を生み出してきました。ここでは職人のやりとりの中から生まれた様々なエピソードを、紹介します。

昭和57年夏、東京・広尾の病院に石堂輝秀さんを見舞いに行った。輝秀（明治32年生）さんは、石堂家10代目の道具鍛冶、鉋作りの当代の名工であり、8代是一、9代秀一と代々日本大工道具史に残る名工の家柄の長男である。大工道具館で入手した無銘の鉋が、その形、鋳跡などから輝秀作と思われるので、お元気なうちに一度お目にかかって、ご本人に直接見てもらいたいとの願いからでもあった。



病床に伏せた老人は、私たちの挨拶に静かに目で応じられた。肺癌を患われて手術のために声は出ない。嘉来さんが抜身の刃を布で押さえて恐る恐る顔の前に差し出すと、静かに両手を出された。私たちは一瞬“ハッ”となった。巾5寸の大鉋である。重い。刃先が胸に向いている。しかし、主の手にかざされた刃物は、微動だにしない。ややあって静かに領かれた。そして「石堂の鉋に間違いありません」と書いて下さった。

それからひと月後に訃報が届いた。

やはりこの年の6月、会津に鑿作りの名工・長嶺重延（明治30年生）さんをお見舞いしたが、翌月には亡くなられた。そして遂に名を刻む間のなかった鑿が2丁遺作となって届いた。私たちは、二人の名人を相次いで失った。時は私たちを待ってはくれない。



この読み物は、竹中大工道具館元副館長・嘉来園夫ならびに元館長補佐・西村治一郎の2名が主となり、「道具・よもやま話」と題して竹中工務店社報（1983年発行）に連載したものを、改めてここに転載したものです。

30年前の記述のため、古くなった内容もございますがご容赦下さい。